

The Gallery voice

NO-44

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2010.11.13
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haeburucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

「見つめ続けること」

与那覇大智

沖縄に帰ると感じることもある。夜空に浮かぶ雲の色が赤いのだ。街の灯りを映しているのだろうか。基地のそれだろうか。その赤い雲は空低く、とても近くでたなびく。手が届きそうだといつも思う。

生まれ育った沖縄を離れて、20年が過ぎようとしている。人生の半分を沖縄の外で過ごしたが、沖縄を忘れたことはなかった。周りの人は沖縄の豊かな自然のこと、戦争のこと、そしてこの1年余りは基地移設のことを語ってくれる。ときに反省の念とともに、あるときは憐憫の情を込めて。沖縄は特別であり続ける。沖縄の外にいくと、沖縄が客観的に見えてくるのではないか、といわれる。確かにそうかもしれない。しかし、僕は沖縄に住んでいたときから沖縄の外にいたみたいだ。「沖縄」なるものに対して、ずいぶん前から微妙な違和感がある。

5年前に1年間、アメリカのフィラデルフィアで過ごした。滞在中、多くの美術館でアメリカ絵画を見てきた僕が共感したのは、ずっと影響を受けてきたはずの抽象表現主義等のアメリカ戦後美術ではなかった。むしろアメリカ国外には出ないであろう、19世紀以前の西欧絵画の亜流として存在していた頃の風景画、つつましい肖像画が、僕にとってとても大事なもののように思えたのだ。ヨーロッパ絵画や戦後のアメリカ美術が、自らのオリジナリティーを誇らんばかりの威風堂々たる雰囲気をかもし出していたのに比して、アメリカの美術館の壁に見る古いアメリカ絵画は、深い喪失感を抱え、自らの存在自体に対する戸惑いが見えた。しかしそれに対する暖かな眼差しもまた、感じたのだ。眼差しを向け続けることの大切さも。

アメリカの国内美術に触れ、僕は自分のなかに大きな「空っぽ」を抱えているのだと感じた。その作品群のなかにある言いようもない空虚さと喪失感に僕のなかの「空っぽ」が共振したのではないか、と今にして思う。僕がアメリカで気づいたのは、内なる故郷の存在ではなく、その不在である。今まで気がつかなかったのは、「沖縄」なるものが、多くの人々によって語られ、それが僕の意識に反映してきたからだろう。

「空っぽ」とはきわめて否定的な言葉だ。自分の存在を根本で支えているものがないことになる。できれば空っぽではなく、満たされたいと、誰しも思う。もしかしたら僕のなかにある空っぽは、郷里への想いというより、個人の存在の本質に関わるものなのかもしれない。それは内なる空虚であり、人間としての弱さなのだと思う。これをそのままにしているのは生きる力を減衰させて

いく。ニヒリズム・虚無とはまさに「空っぽ」に飲み込まれる様をさす。その中に留まってはいけない。空っぽ、弱さにどう向き合うか。駆逐するべきか。乗り越えるべきか。それとも...。今思えば、これが僕が制作でずっと悩み、苦しんできたことなのかもしれない。

しかしながら、心の真ん中に「空っぽ」を抱えつつ、僕は走ってきた。それに気づいてからも、辛くはあったが走り続けてきた。作品の質はともかくとして、制作し作品を他者に問うことを、人生の中心的課題に据え続けた点に関して、僕にはささやかな自負がある。とするならば、「空っぽ」は何らかの力を有しているのではないか？なぜなら、それは一方では僕の存在に意味を与えているように思われるからだ。「空っぽ」について考え続けることは、僕の生き方に幾許かの創造性を与えてくれる。希望といえるかもしれない。

いま、僕は内なる「空っぽ」に寄り添ってみようと思っている。空っぽに飲み込まれることなく、ときに諍いつつも、隣人としてともに生きていくことを選ぼうと思う。



「Home-Reflection 2」

油彩 194.x259.cm 2010

宇宙の運動を成立させるうえで大きく関与しているブラックホールは、質量はあるが手触りはない。本質的な力は物質的なものに担保されずに存在するのかもしれない。光さえ飲み込む、暗黒の存在の関与を受けて、宇宙は自らを輝かせるのだ。

おそらく、世界に無駄なものはない。

僕はずっと、光をテーマにして制作してきた。僕が追い求める光は、闇を照らし、闇を取り除く光ではない。むしろ、闇とともにある光だ。それが僕にとってもっとも親しく、信頼できる光である。

再び空を見上げてみる。

眠らない街の灯りは夜の雲を照らし、赤い雲は僕を照らす。やがて陸地を離れ、暗闇を貫く水平線に近づくにつれ、雲は月の色になる。その往還は夜通しつづく。それを見つめ続けようと思う。(よなはたいち/画家)

幻視的な拡がり

山本秀夫

建物や乗り物は、その中に私たちが入ることのできる極めて特殊な造形物だが、それらを外側から塊として捉えるのと、内部から拡がりや深みとして眺めるのでは、眼差しのゆくえは真逆である。

世界をマッス（塊）として捉えようとする時、物質だろうが空間や時間だろうが、動きだろうが観念だろうが、その塊は、求心性（中心性）を志向する（しばしば、その中心には排他的な神や人がいたりする）。

一方、世界をボリューム（拡がりや深み）として眺めると、事態は完璧にひっくりかえり、全ての要素は、世界の拡がりや深みの中に溶解する。なぜならば、拡がりや深みにはきりがないからだ。視覚を遮断する壁があったとしても、その向こうにも世界は拡がっているからだ。

結論じみたことを先に述べてしまえば、沖縄の美術の最も顕著な特異性であり、かつ真骨頂は、このボリュームとしての世界の顕在化にある。そして現在、平面的な世界で沖縄美術の系譜を受け継ぎ、かつて見たこともないボリュームを展開しているのが、与那覇大智である。

ところで、美術作品は社会化（公開）された途端に作り手を離れ、鑑賞者との関係に委ねられる。これが美術作品の存在構造である。

作品の意味とか価値といわれる事柄は、作り手の意向やねらい、意識、感性などではなく、鑑賞者との関係によって定められる。

百人の鑑賞者がいれば、百通りの解釈や感じ方が発生する（そのような位相の中で、美術批評は、鑑賞者の何らかの手助けになるかもしれないが、それ以上でもそれ以下でもない）。

故に、美術作品にしろ美術批評にしろ、それらが成り立つのは、鑑賞者が持つ自由な眼差しが前提である。

こうした美術作品の存在構造を踏まえて、与那覇の作品に接してみよう。

ここ数年の与那覇の作品は、幻視的といってもよい不可思議な世界が展開されている。《Oギャラリーのサイトで今年の四月に発表した作品写真を参照》

一連の作品は何が描かれているかは定かでないという意味だけではなく、幻視的である。

穏やかにぼんやりと作品を凝視する。しば

らくすると、そこには描かれていない別の何か（像というにはおぼろげな何か）が変化を伴って立ち現われてくる。網膜上の出来事なのだろうが、この幻視は事実として発生する。それは作品に眼差しを向けるという行為の中でしか発生しない。

こうした与那覇の作品の特質を念頭に入れて、今回の新作 Home-Reflection について思いを巡らしてみよう。《画廊沖縄のサイトにてこの作品写真を参照》



「Home-Reflection 1」

油彩 91.x162cm 2010

この作品もまた幻視的という要素を持っているが「あたりが暗くなった夕暮れの、それでもまだ空は明るい時の水たまりに映った空のような」と、ことばで説明ができそうな作品である。こうした説明は陳腐だが、仮に水たまりと解釈しても、水たまりに映った空とはこれまた、幻視的なモチーフではないか。見て（描いて）いるのは水たまりの水面の絵なのか、水たまりに映った空の絵なのか。

こうした拡がりや深みを持った、かなたへ向かう眼差しこそが、沖縄の造形の本質的な魅力である。

与那覇はこれまでも様々なスタイルを試みているし、立ち止らない。そのエネルギーの源泉がどこにあるのかはここでは問わないが、隆起珊瑚の島に脈々と培われている遺伝的な感性と眼差しにますます磨きを入れていることは確かだ。

ここでは、与那覇は作品というステージ（装置）を私たちに提供しているにすぎない。そのステージで沖縄の眼差しを感受するのは、作品に眼差しを投げかける私たちなのだから。

（やまもとひでお／インディペンデント・キュレーター）

与那覇大智作品展に寄せて

鶴田 大

与那覇大智作品をみるとよく「兆し（きざし）」めいたものに喜びを感じます。何かがゆらぎ、かたちを生成してゆく現象の描写。その兆しめく感覚が今回の作品群にはより際だっているようです。

そもそも現代美術の脈絡からは一定の距離のある、琳派美術・平安和歌文学などを中心に日本文化を遊学する私にも心地よく与那覇作品が響くのはなぜか。…一つには、与那覇作品が現代美術世界のさ中で、ことさら「次の一手」を狙っていないというせいかもしれません。「現代美術」の流れ（文脈）に沿って与那覇作品をみようとしないう私がその表現に惹かれるということは、現代美術が本来的には市民感覚に対し開放されていることを暗示しており、私のような「誰もが直接、知るべき」古典や最新ニュースは存在しないと考えている者にうれしいことです。（私は、世界の「融通（ゆうづう）的」「弱結合」的な情報伝達のありようの成熟に信頼を寄せているのです。）

美術が私に必要である理由は、おそらく日常のモヤモヤを楽にしてくれるからであり、それが与那覇作品においては、冒頭に書いた「兆し」の感覚です。

抽象画と一般に呼ばれる与那覇氏の作品群において作品タイトルは、私たちが日常生活や夢で体験する「兆し」のイメージを呼び起こす重要要素です。近年の作品タイトルを列挙すると…律動になろうとする間にゆらぐ気流を感じさせる『光の匂ひ』。死と生成（生業）の緊張感・解放感を味わう『繭をほどく』。筋道（≒思考回路）がゆるやかに浮かび上がるかのような『散策』。運命（≒死相）が動かしがたいものになろうとする『道行き』。郷愁のありかである土地の深層とそこにまつわる人々の面影が浮かび上がろうとする『Home』などなど。

さらに作品画面は、作品タイトルを窓口のようにして私的な「兆し」のイメージの世界を描きます。仮に私が幻視するのは、象形文字（漢字）が名もなき誰かの脳裏に出現しつつあった時間。あるいは和文・琉文など（漢字仮名交じり文）が母語の視覚化を目指す一群の人々の手によってまさぐられた時間。水墨画技法が、あるいは大和絵技法が、油彩画技法が生まれようとした時間のたゆたい。迷いから脱するための或る想念が人の胸中に宿ろうとしたありさま。…

そもそも与那覇作品の多くには、画家の眼裏（がんり）に宿ったイメージが絵画という「かたち（物質）」になろうとする直前の視神経のあいまいさをあえてつぶさに写しとったのではないかと感じさせる要素があります。そうとすれば与那覇作品は、タブロー（油彩画）という古風な表現形式を用いながら「美術の創造過程そのものをあかすみに出す」という、実に「社交性（≒批評性）」に富んだ表現だとも云えます。



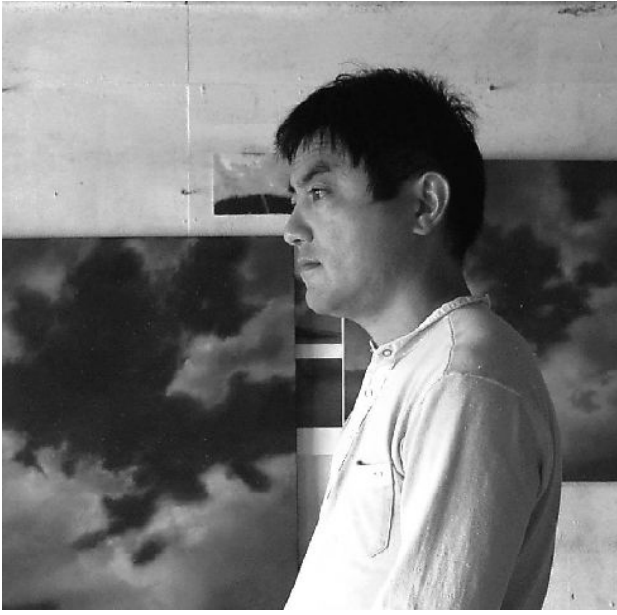
「Home-Reflection 4」

油彩 53.2x65.2cm 2010

いつだったか、画家・与那覇氏の倫理観（「正しさ」の感覚）の一端にふれる機会がありました。それは私が、「真に芸術的なものは倫理的であり、また真に倫理的なものは優れて芸術的である」という内容（やや不正確でしたが…）の漱石の日記か何かの筆記を引き合いに出して与那覇氏に、倫理観と絵画表現との間に何か関係があるのかをたづねた時です。氏は少し考えてから確信めいた響きを持ってこう話してくれました。「そうですね、やはり関係があると思います。僕の絵は抽象画が多いのですが、たとえば、画面に唯一の強い光源が設定されることはほとんど有りません。光源がおぼろげだったり複数の光源が想定されることが多いのです。また色合いを加味した明暗表現もかなり微妙な性格のもので、悲観的にも楽観的にも受け取られる。これらはおそらく僕自身の価値観、つまり単純な善と悪、明と暗の区別に懐疑的だ、ということが反映されていると思います。ですから様々なものの見方が共存するというか、それらを許容したいという思いが自然と画面にも現れるのかもしれない。…それを、可能な限り精確に描写したいですね。」

（つるた おおき／志香須賀文庫 学芸員）

TAICHI YONAHA



与那覇大智について

与那覇大智氏は1967年沖縄市生まれ。1990年沖縄県立芸術大学を卒業、2003年には筑波大学大学院修士課程芸術研究科終了した。以後現在まで17年、東京を拠点に精力的な制作と発表活動を続けている。東京のアートシーンにあっては、毎年開いている個展を楽しみにしているファンやコレクターも増えているようだ。その活動と内容を証明するかのようになり、一昨年から東京の現代美術オークションに与那覇作品が出るようになった。図録には一定の評価（エスティメート）が示されている。作家においては、作品が本人の知らないところで作品内容と金銭的な評価がされ、売買が行われことに、ある種の抵抗や複雑な思いがよぎるかも知れない。しかし、それこそ作家を生業とする者の勲章であり、仕事（作品）が現実社会に具体的に関係し、成功へのステップを踏み出した証である。多様に広がる現代美術のマーケットはグローバル化し、東京においても世界経済の動向と連動し厳しい現場である。

創立25周年を迎えた沖縄県立芸術大学の一期生でもある与那覇大智。競争の激しい中央の現代美術シーンに拠点を構え、決して生易しくない生活環境の中で、前へ前へと歩み活動が続ける美術家の姿を、後輩たちはどのような印象で捉えているだろうか。サヴァイバルなアーティスト人生は半端ではない。

2008年、東京国立近代美術館「沖縄プリズム 1872～2008」展に与那覇作品（The Ppssage of

Shine-pA8/油画）の大作が展示された。現代美術（コンテンポラリー）界において、油画のきわめて伝統的な技法を用いた与那覇の地味な作品が輝いていた。静寂しきった画面が強い存在感を漂わせているのはなぜだろうか。油彩絵画という近代を象徴する表現手段をとりながら、造形主義や抽象表現主義にも依拠しない独自の世界を切り開いている。自己が時代に真正面から向き合い、それを乗り越える精神の営みが画面からこちらに伝わってくるのだ。

さて今回は2007年以来、沖縄で3年ぶりの個展となった。日米安保50年企画「安保一 Friendship」に与那覇がどのような角度からアプローチしてくるのか、大きな期待を寄せていた。与那覇は「今の時代を生きる自覚があれば、おのずとその結果として作品に反映される」と語った。時代と作家、状況と作品の認識のずれはなかった。送られてきた新作「Home-Reflection 1」（本紙2項画像）は期待通りである。現実の水面を見る眼差しと、それに映る虚像の空の雲。ミクロとマクロがシンクロし、画面は一瞬にして天空の彼方から眼差す不思議な境地に立たされる。観る者を現実の感情の世界から、冷静な思考を促す静寂な空間に誘う。未来志向と新たな認識世界の在り処を気づかせる瞬間である。

今回のテーマ設定はこれまでの与那覇の作品（Home シリーズ）の延長線上にあり、「Home - Reflection」で臨む。Reflection は水面に反射した像、沈思、熟慮、熟考などの意がある。遠く Home（故郷）を離れ、振り返るとき、与那覇がイメージしたのは何か。米軍基地に隣接した地域に育った事も起因して、実に奥が深い。

第一展示室の2点の大作に注目したい。「Home - Reflection 2」はやや見上げる位置にあり、「Home-散策 1011」はやや視線を下げて見る位置に据えている。2点は相互に関係し、絶妙な美しい空間を構成している。ミクロとマクロを往還しながら、状況から脱する出口を探すかのように、リラックスした面持ちで探索と思考がどこまでも追いかけてくる。日常の硬直した脳裏をほぐし、突きあがる感情を鎮め、画面と対話し、座して瞑想を喚起するかのようである。

人は解決しがたい苦境に陥った時、どのように対処すべきか、与那覇の作品は多くの示唆を与えてくれる。深い認識の世界を示してくれたことに感謝したい。安保改定50年企画を終えるにふさわしい内容の展示会となった。「Reflection = 熟考」はしっかりと胸の中にしまいたい。

（画廊主／上原誠勇）

与那覇大智【YONAHA TAICHI】

1967年 沖縄県生まれ
1990年 沖縄県立芸術大学美術工芸学部 卒業
1993年 筑波大学大学院修士課程芸術研究科 修了

個展

1996年 個展 (茨城県つくば美術館)
1998年 「光の匂ひー the passage of shine ー」(O ギャラリー・東京)
「光の匂ひ」(CTI ウィンドウギャラリー・東京)
1999年 「光の匂ひー the passage of shine ー」
(Za Gallery 有明・東京) (O ギャラリー・東京)
2000年 「光の匂ひー the passage of shine ー」(ギャラリー舩・東京)(O ギャラリー eyes
・大阪)(O ギャラリー・東京) (ノイエス 朝日・群馬)
2001年 「光の匂ひー the passage of shine ー」(不二画廊・大阪)
(O ギャラリー eyes・大阪) (O ギャラリー・東京)
2002年 「光の匂ひー the passage of shine ー」
(画廊沖縄・沖縄) (ギャラリー舩・東京)
「ー the passage of shine ー」(O ギャラリー・東京)
2003年 「ー the passage of shine ー」(グスクフ M・愛知)(O ギャラリー・東京)
2004年 「ー the passage of shine ー」(O ギャラリー eyes・大阪)
「THE COVER」(Za Gallery 有明・東京)
「光の匂ひー the passage of shine ー」(ギャラリー舩・東京)
(O ギャラリー・東京) (アートギャラリーつくば・茨城)
2005年 「光の匂ひー the passage of shine ー」(O ギャラリー・東京)
「みこもり」(Za Gallery 有明・東京)
2006年 「あたたかい場所」(ギャラリーちびえろ・東京)
2007年 「Home」(O ギャラリー・東京) (画廊沖縄・沖縄)
2008年 「Home」(O ギャラリー・東京)
2009年 「与那覇大智展」(O ギャラリー・東京)
2010年 「与那覇大智展」(O ギャラリー・東京)
「Home-Reflection」=安保-Friendship=日米安保改定 50 年企画(画廊沖縄・沖縄)

主なグループ展

1991年 「'91 美 (チュラ) 展」(目黒区美術館、練馬区美術館・東京、
以後 95 年まで場所をかえて毎年)
1992年 第 2 回若手作家現代美術交流展「OKINAWA Open Air Exhibition 1992」
(沖縄県玉城村百名ビーチ・沖縄、以降 95 年まで場所をかえて毎年)
1995年 第 5 回若手作家現代美術交流展ロンドン展 (Glove1 Gallery・ロンドン)
1997年 第 26 回現代日本美術展 (東京都美術館・東京、98 年賞候補)
第 8 回関口芸術基金賞展 97,98,02 年優秀賞 (柏市民ギャラリー・千葉)
チェコー日本現代美術交流展 1997 「Projekt vystav C2 a Kurta
Gebauera」(Academy of Applied Arts・プラハ)
ケルンー東京現代美術交流展 1997 「conneKTed」(ART icle・ケルン)

- 1998年 第3回アート公募 準大賞 (SOKO ギャラリー、モリスギャラリー、東京 * 99年審査員賞、01年奨励賞)
第37回北陸中日美術展 (石川県立美術館・石川)
- 1999年 第1回夢広場はるひ絵画展 奨励賞 (はるひ美術館・愛知)
- 2000年 「“検証”描くということ」 (Oギャラリー・東京)
VOCA展 2000 (上野の森美術館・東京)
「アジマー展・絵画専攻教員・卒業生による展望と交叉」
(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館・沖縄)
- 2001年 N I C A F 2001 TOKYO (東京国際フォーラム・東京)
- 2002年 「遠藤丈暁 与那覇大智 二人展」(なるせ美術座・東京)
「第6回アート公募受賞選抜作家展」(exhibit LIVE [laiv]・東京)
- 2003年 「栗国久直、フジイ・フランソワ、与那覇大智」(ギャラリーラ・フェニーチェ・大阪)
「Christmas in Peace 平和へのメッセージ展」(佐藤美術館・東京)
「美術誕生」(八王子夢美術館・東京)
- 2004年 「未来へ 開かれた空間展」(神奈川大学セレストギャラリー・神奈川)
「福島現代美術ビエンナーレ」(福島県文化センター・福島)
- 2006年 「scope NEW YORK」(636 Eleventh Avenue・ニューヨーク)
「WAR!T」(MBN STUDIOS・フィラデルフィア)
- 2007年 「第27回損保ジャパン美術財団選抜奨励展」(損保ジャパン東郷青児美術館)
- 2008年 「沖縄プリズム 1872-2008」(東京国立近代美術館)
- 2009年 「Field Translation (View/Introspection)」(O ギャラリー eyes・大阪)
「BRIDGE 2009」(AKKO ART GALLERY・バンコク)
「ベンと私；中里斉と文化庁在外芸術家展」(養清堂画廊・銀座)

助成

- 1997年 第11回ホルベインスカラシッパ奨学生
2005年 ~ 06年 文化庁新進芸術家海外留学研修生(アメリカ・フィラデルフィア滞在)

【パブリックコレクション】

沖縄県立博物館・美術館、沖縄県立芸術大学、柏市文化フォーラム104、佐喜真美術館

【主な参考文献】

- 大谷省吾：「与那覇さんの絵と空」(2007年9月 Gallery Voice)
佐藤文彦：「与那覇大智展に寄せて」(同上)
中村秀樹：琉球新報 2007年9月27日(展評)
千葉茂夫：沖縄タイムス 2007年9月27日(展評)
鷹見明彦：美術手帖 2008年1月号「画家たちの美術史 59」
鈴木勝雄：「乱反射する沖縄」(2008年9月 沖縄プリズム展カタログ)
山本秀夫：沖縄タイムス 2009年4月24日(展評)
小島静二：沖縄タイムス 2010年4月23日(展評)
山本秀夫：琉球新報 2010年4月26日(展評)